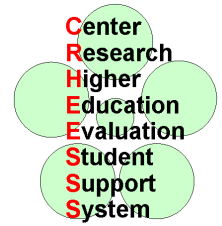


# 週刊センターニュース No.322



第322号(2010年8月30日) 毎週月曜日発行  
発行：金沢大学 大学教育開発・支援センター  
URL：<http://www.rche-kanazawa-u.jp/>

## 〇〇〇 第1回FD研究会開催のご案内 〇〇〇

主催：大学教育開発・支援センター

日時：9月6日(月) 15時～16時30分

※開催曜日・時間にご注意下さいますようお願い致します。

場所：総合教育1号館2階大会議室

テーマ：ICTによる協調学習支援を考える

発表者：山田政寛(教育支援システム研究部門)

趣旨：近年、高等教育においてプロジェクト学習などの授業外支援としてコンピューターによる協調学習支援環境(CSCL)が使用されているが、初等中等教育のクラスのような一体感が薄いことなど問題点が指摘されている。そのほかにも知識伝達型の講義と異なり、協調学習ではグループメンバーの自己開示を促すなど、学習内容とは異なる、インフォーマルコミュニケーションの支援も必要となる。

本研究会では実践的な人材育成が求められる大学において、最近注目されている、アクティブラーニング、特に協調学習に焦点化し、ICTを利用した協調学習支援環境についてあるべき姿を議論したい。

## 〇〇〇 大学評価担当者集会 2010 参加報告 〇〇〇

8月27日(金)に九州大学で開催された 大学評価コンソーシアム主催大学評価担当者集会 2010 に参加した。大学評価担当者集会とは、2007年度から九州大学大学評価情報室主催で開催されているもので、大学における実務作業を含む評価関連活動に関する研修、情報交換の場となっている。2009年度は「法人評価・認証評価のインパクトとこれからの大学評価ー評価結果は、どのように大学経営に反映されているのか?ー」のテーマの下、64大学等機関から150名の教職員が参加。2010年度のテーマは「大学評価の未来を考える」で、82大学等機関から170名が参加した。2010年度は、より研修的色合いが強まり、基調講演の後、第1分科会『大学情報の収集と活用ー効果的・効率的の方法とは?ー』、第2分科会『日本の大学評価とIR』、第3分科会『計画と評価の連携ーその仕組みと日常的な工夫について』、第4分科会『はじめて評価の仕事に携わる方々のために』の4つの分科会に分かれて議論を行った。このうち、第1、第3、第4分科会は、ワークショップ形式で、実際に課題を与えられ、作業を行う形で進められた。筆者は、第2分科会および前日のプレ・イベント『IR機能の大学における具体化ー大学評価を軸にー』(ワークショップ形式)に参加し、IRが作成するレポートが、大学において戦略決定や意志決定につながるプロセスや問題点について他の参加者と認識共有を行った。

日本の大学における IR への認識不足については、すでに、当センターの尾関博士研究員が『週刊センターニュース 311 号』で書いているとおりであるが、今回の集会においても、IR が単なるデータ収集、データ整理担当者ではなく、大学全体のマネジメントに関わり、大学の運営方針や戦略決定に資する活動を担う部署であるという話がされていた。従来型の日本の大学組織においても、学生情報、教員情報、財務情報などの様々なデータが、様々な部署で収集されており、必要に応じて評価活動等に利用されている。しかし、それらの活動は IR とは呼べない。上でも述べたが、IR 活動とは、戦略決定に資するために行われるものであり、解決すべき課題があり、それに関連するデータを収集・分析し、意志決定の根拠となり得る報告書を作成することなのである。この活動を担保するためには、「持続可能性（一時的なプロジェクトではない）、学内有用性（大学の教育研究活動、管理運営の改善に資する）、客観性（経験値に頼る業務改善ではない）、即時性（すぐに対応できる体制）、反復可能性（誰が行っても同じ体制）」（福岡大学の佐藤仁氏の報告より）が必要である。

また、ニューヨーク州立大学 Empire State College の IR Analyst である本田寛輔氏によると、アメリカにおける IR の一般的な業務は、a. 大学年報の作成、b. 州や連邦政府への業務報告、c. 各種ランキングへの対応、d. 学生の満足度や学習度のアンケート調査、e. 学生募集や在学歴の調査分析、f. 学習成果の測定、g. 成果指標の作成などであり、大学類型によって上記 a~g のどれに重きを置くかが変わってくる。例えば、州立フラッグシップ大学では b が、アイビーリーグでは c が、コミュニティカレッジでは a、b が重視される。最近アメリカでは、用語として IR (Institutional Research) が Institutional Effectiveness となり、担当者も部長クラスから副学長クラスへ移り、より実質的な活動が求められてきているとのことであった。

これまでも筆者は、内部質保証体制の構築の重要性を訴えてきたが、この内部質保証体制に、大学全体の戦略として IR 活動をどう組み込めるかが、今後の金沢大学における評価活動を受身からより能動的な攻めの姿勢へと変える鍵となるのではないだろうか。

最後に、大学評価コンソーシアムとは、大学間の連携・協力を通じての大学評価に関する課題の解決を目的として、より恒常的・日常的な連携・協力の枠組みとして設立されたものであり、「大学評価担当者集会」だけでなく、今後、評価担当初任者対象の SD セミナー開催や、評価ハンドブック作成を目指しての共同研究などを進めていく予定である ([http://www.j-cache.org/blog/?page\\_id=2](http://www.j-cache.org/blog/?page_id=2))。

(文責 評価システム研究部門 堀井祐介)

## ○○○ 高等教育関連書籍紹介 ○○○

『大学関係六法 第一版』(エイデル研究所) <http://www.eidell.co.jp/book/?p=3079>

高等教育に特化した初の法規集。高等教育を規律する法律、政令、省令、告示、通達等をジャンルごとに整理して収録。認証評価機関の認証評価基準をすべて収録。高等教育に係わる主要な論点に触れた詳細な解説を収録。大学教育開発・支援センター図書室(総合教育 1 号館 6 階 613 号室。センター共同研究室向かい)に所蔵。ご連絡いただければ、関係者割引での購入が可能です。